

イギリス学校小説における読書指導観

——ジャーベイズ・フィンの場合——

武田ちあき 埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：学校小説、読書指導、家庭教育、学校教育、社会教育

1. 序

イギリス学校小説のベストセラー作家、ジャーベイズ・フィン(Gervase Phinn, 1946-)の作品でとりわけ印象的なのは、「読むこと(reading)」への真摯な情熱である。教員から州視学官に転身し、さらに大学特任教授・小説家・詩人となる、その多彩な経歴において、読書指導はひとつの大きなテーマとして、広範な仕事を貫く柱になっている。

現場の教員および視学官としては、国語科(英語科、English)と演劇科(Drama)を担当していたフィンだが、彼の論は、教科教育学の見地から具体的な指導法の妥当性や是非を語るにとどまるものではない。また、全教科における言語の重要性は、学校小説の大先達、ミス・リード(Miss Read, 本名 Dora Jessie Saint, 1913-2012)のペンネームにも象徴されているところだが、フィンの読書観は、学校教育の枠にも収まりきれない。もっと広いビジョン、もっと大きいスケールで「読むこと」を唱道し奨励する、彼の圧倒的な存在感は、どこから来て、何をめざすのか。

その鍵になりうるのが、「親業(parenting)」という概念である。「親としてなすべき仕事」、「親の道」。フィンの根本にはこの意識があり、親業を行う家庭教育のバリエーションとして学校教育・社会教育があって、人の一生を貫き、その先へも続いていく活動として「読むこと」を捉えているのではないか。それは国民の未来につながる、人間への信頼に満ちた、明るく逞しい教育観なのではないか。

この仮説を検証する方法として、本稿では、フィンの学校小説の中に現れた読書指導の言説を文化的・社会的に分析する。併せて、彼の自伝、教員向け読書指導マニュアル、笑える英語ネタ集などの多方面にわたる著作も対象とし、フィンの読書指導観の全容とその意義を明らかにしたい。

2. 家庭教育と読書指導

2-1 親業のススメ

家庭教育における読書指導の重要性とその方法についてのフィンの主張は、きわめてシンプル。「寝る前に親子で30分、本を読む」——これに尽きる。視学官としての日々を綴った『デールズ』シリーズ(Dales series, 1998-2010)の第5巻『谷の奥』(The Heart of the Dales, 2007)で、フィンは言う。

“You know, if every parent in the country read with their children every night for just half an hour it would make so much difference.” (82)

（「ほら、国中の親がみんな、自分の子どもと、毎晩ほんの半時間、いっしょに本を読んだら、それはもう、うんと違ってくるだろうにね。」）

また、ほかの登場人物にも、こう語らせる。

“Half an hour of reading before bedtime...will bear the fruits of a lifetime.” (198)

（「おやすみ前の読書の半時間が……結ぶ実は一生ものですよ。」）

英国では添い寝の習慣がなく、赤ちゃんの時から親子は別室で寝る。したがって、寝かしつけるための子守歌や本の読み聞かせは、もともと、親として欠かせない務めである。しかしフィンがここに見ているのは、「読む」という経験を与えることで「本への愛」や「ことばへの興味」を子に持たせることの、大きな可能性である。そこには、子どもの人生の基礎を築いてあげる、という親業の真髄がある。それをすることが「親であること」、「親となること」(parenting)なのである。

この読書指導の本義を、フィンは教員向けの読書指導マニュアル、『子どもの読み手と本——読み書きの時間で本をどう使うか』(*Young Readers and their Books: Suggestions and Strategies for Using Texts in the Literacy Hour*, 2000)の序文で、こう表現している。

Reading is the fundamental tool for all learning. Reading opens doors. Reading is the very key to knowledge...this book...also provides a resource not merely to help children to read but to help them to become keen, discriminatory, lifelong readers and lovers of books. (v)

（読むことは、あらゆる学問の基礎になる手段です。読むことが扉を開くのです。読むことこそが、知識への鍵です……本書は……素材も提供していますが、それは、ただ子どもたちが読むのを助けるだけでなく、子どもたちが、鋭くて、見る目のある、一生にわたって本を読む人、本を愛する人になることを助けるためなのです。）

この指導書の本文には、具体的で専門的な読書指導のノウハウが詳細に記載されているが、その目的は目先の授業ではなく、その先の子どもの人生であることが、ここにはっきりと宣言されている。この序文は、学校教育が常に立ち返る必要のある原点として、家庭教育における読書指導の意義を再確認しているのだ。

同書の冒頭に題辞として掲げられたフィン自作の詩も、この読書指導の本質を要言している。

Treasure

Opening the covers of a book
Is like lifting the lid of a treasure chest.
Look inside and you will find
Golden stories and glittering characters.

Some are given a map to show them where X marks the spot,
Some are given the precious key to open up the lock,
Some are helped to lift the heavy lid,
But for some it will remain a buried treasure. (ix)

(宝

本の扉を開くのって
宝箱のふたを持ち上げるみたいだよ
のぞいてごらん、ほら見つかるよ
金色に輝くおはなしや、きらきら光るキャラたちが。

宝のあるところに印のついてる地図がもらえる子もいるよ
錠前を開ける、だいじな鍵をもらえる子もいるよ
重いふたを持ち上げるのを、手伝ってもらえる子もいるよ
でも、本が埋もれたままの宝になっちゃう子もいるんだ。)

この詩は、家庭が与えるべき読書の喜びを謳い上げるとともに、家庭で「宝箱のふた」を持ち上げてもらえなかった子に、学校が手をさしのべる必要を訴えている、とも読める。つまり学校は家庭のバックアップであって、家庭のほうが本来はメインなのだ。毎晩寝る前に 30 分、親子で本を読むこと——フィンの勧める親業の要諦は、この「宝箱のふたを持ち上げる」ことにあるのだった。

2-2 種蒔く人

「本を読むことの大切さを、親が子に伝えるべき」というフィンの信念のルーツは、自分の幼少期の実体験にあった。アイルランド移民の貧しい家庭に生まれたフィンが、教育者・文学者として、下剋上と言っていいくらいの異例な出世を遂げたのは、ひとえに幼年時代の読書体験ゆえであることを、なによりも本人が強烈に意識しているのである。

自伝『谷への道——あるヨークシャーの若者の物語』(*Road to the Dales: The Story of a Yorkshire Lad*, 2010)でフィンは、並外れた文学的才能の持ち主だった祖母の愛情に、いかに恩恵を受けたかを、満腔の謝意とともに回顧している。

I looked forward to the Sunday visits because Grandma Mullarkey took a particular interest in my reading and writing. I cannot pinpoint the precise moment when I came to the decision that I wanted to be a writer, but certainly on those occasions when I sat with my grandmother listening to her stories and anecdotes, her reminiscences and commentaries, the seed was sown. (94)

(私が日曜の訪問を楽しみにしていたのは、マラーキーおばあちゃんが私の読み書きにとりわけ心を寄せていたからだ。作家志望を固めた瞬間がいつだったか、はっきり特定はできないが、でもこれだけは確かだ。祖母と一緒に座って、祖母の語る物語や逸話、思い出話や実話に

耳を傾けていた、あのひとときに、その種は蒔かれたのだ。)

語り部としての祖母の非凡なパフォーマンスは、孫を魅了するだけでなく、その後年の授業のお手本たるに足るレベルだった。

When Grandma read, I thrilled at the sound of the words, the rhythms and the rhymes and would sit goggle-eyed at the power of her voice and her extraordinary memory. She knew passages of verse by heart and had a natural feel for measure and stress; I still recall snippets of verse she would recite: (95)

(おばあちゃんが読むと、私はぞくぞくした——その単語、リズム、韻の響きときたら。声の力強さと、とんでもない記憶力に、私はすわったまま目を真ん丸に見開いたものだ。祖母は詩の一節をいろいろ暗記していたし、韻律と強勢にかけては天賦の感性を備えていた。祖母がよく暗唱していた詩の断片を、私はいまでも覚えている。)

この祖母は、経済面でも孫の作家修業を支援してくれている。

It was Grandma Mullarkey who bought me my first dictionary when I started secondary school, and the treasured portable Olivetti typewriter with the black and red ribbon. I would sit with it on my lap feeling like “a real writer.” (97)

(私が中学に上がった時に最初の辞書を買ってくれたのもマラーキーおばあちゃんだったし、今も大事にしている携帯型のオリベッティのタイプライター、黒と赤のリボンつきのもの、そうだった。私は座ってそれを膝に載せ、「本物の作家」気分を味わったものだ。)

「家庭における読書指導が子どもの人生を変える」というフィンの持論は、自分自身がその実例であったことを、彼はこう約言している。¹

Grandma Mullarkey opened a door in my early childhood and changed my life for the better.... (98)

(マラーキーおばあちゃんは私の幼い頃に扉を開き、私の人生を良い方に変えたのだ……。)

そしてフィンは、この祖母を、まさに「きらきら光るキャラ」として、自分の作品に登場させる。『デールズ』シリーズでは理科・技術科担当の視学官、美貌の才媛マラーキー博士。『小さな村の学校』シリーズ(*The Little Village School series, 2011-16*)ではアイルランドの知恵袋、マラーキーおばあちゃん。それは、実在の祖母がフィンに蒔いた種を、今度はフィンが創作で読者に蒔いていく、報恩と継承の仕掛けである。幼時の読書が「結ぶ実は一生涯のもの」であることを、フィン自身がこうした形でも実証しているのであった。

2-3 父の肖像

フィンの小説には、家庭教育における読書指導の大切さを、物語の中で読者に迫体験させ、実感によって説得する機能がある。それは文学者としてのフィンが持つ、もうひとつの教育手段なのだ。その効果的な例が『デールズ』シリーズの第3巻、『谷でてんやわんや』(*Head over Heels in the Dales*, 2002)に登場する祖父と孫に見られる。²

フィンが視察先の田舎の小学校で出会った男児は、読み書きの両方に卓越した才能の片鱗をうかがわせたが、何よりも目を引いたのは、その堂に入った立ち居振る舞いだった。

When we got to the reading, the boy shuffled again on his chair and opened the heavy tome, sliding his second finger along the top of the page and running it behind like a seasoned reader.

“Who taught you to turn pages like that, William?” I asked.

“Granddad. He’s a gret reader is mi granddad. Can’t get enough books. When we goes to t’library, he gets reight cross when he oppens a book and sees all them grubby thumb marks on t’bottom o’pages. He reckons you ’ave to ’ave respect for books. That’s how yer turn the pages of a book, tha knaas, from t’top.”

“Yes, that’s right,” I agreed.

“ ’Old a book in your ’and and you’re a pilgrim at t’gates of a new city.”

I was stunned into silence. (7)

(読みにとりかかると、その子はいすに座り直して重い大冊を開いたが、人差し指をページの上にすべらせてから、その裏に回す手つきたるや、まるで年季の入った本読みだった。

「そういうページのめくり方を、誰が教えてくれたのかな、ウィリアム？」私は尋ねた。

「じいちゃんだべさ。すげえ本読みよ、じいちゃんはや。本、たくさんは買えねえべ。図書館さ行くどもよ、本っこ開いてページの下さ、きったねえ親指のあとがいつぺえ、ついてたりするべ、したら、しっただけ、ごしゃぐのよ。じいちゃんは、本は敬わねばなんねえ、って言うだ。本のページは、こんたらふうに、めぐるもんだ、ほれ、上から、ってな。」

「ああ、ほんとだね」と私はうなずいた。

「本を手にとるがいいだ、したら、おめえは、行ったことのねえ町の門を前にした巡礼だ、ってな。」

私は感動のあまり、口もきけなかった。)

この「じいちゃん」がじつはメソジスト派の説教師で、毎晩自分に聖書を読んでもくれる、と少年は明かす。この子の読書の技量とマナーは、まさに家庭仕込みのものだったのだ。

さらに少年は、宗派の祖ジョン・ウェスリーの逸話をフィンに語る。ウェスリーは19人兄弟のひとりで、父親がやはり毎晩ウェスリーに聖書を読んでもくれたけれど、小さかったウェスリーは聖書を向かいからのぞきこんでいたから、字を上下逆に覚えたってさ、と笑わせる。ここでは、親が子に毎晩本を読んであげる営みが、英国の宗教界でも受け継がれてきた伝統であったとわかる。

少年は自作の詩も披露し、その中で使われている方言を知らなかったフィンに、百科事典も顔負けの見事な解説をしてみせる。

“I see. Well, that’s something I’ve learnt this morning.”

“Mi granddad says you nivver stop learnin’.”

I tested William on his spelling, punctuation, knowledge of vocabulary and grammar and was well satisfied.

“It’s been a real pleasure talking to you,” I told him, closing the folder of work.

“Likewise, Mester Phinn,” he replied. Then, getting to his feet, he patted me on the back as a grandfather might do to his grandson. (11)

(「なるほど。じゃあ、今日は、学ばせてもらったね。」)

「じいちゃんは言うだよ、学びに終わりはねえ、ってよ。」

私はウィリアムのつづり、句読法、語彙と文法の知識もテストして、大満足した。

「君に話せて、本当に楽しかったよ」と私は言って、仕事用のファイルを閉じた。

「こちらこそだ、フィンせんせえ」と彼は応えた。それから立ち上がり、私の背中をぽんぽんたたいた——まさに、祖父が孫にするように。)

泣く子も黙る視学官³を相手に、若干 10 歳の小学生の、この堂々たる渡り合い方。大人びた物言い、老成した仕草。それに伴う、国語の全領域における高い学力。この爆笑シーンは、ほかならぬ家庭の教育力の、なによりの証明なのである。⁴

そして、フィン本人が実名で主人公を務める、このノンフィクション・シリーズがひとときわ心を打つのは、フィンが親の指導者としてのみならず、当事者の親としての立場からも、家庭の教育に心を砕く、その姿勢ゆえである。

『デールズ』シリーズの第 4 巻『谷でうろうろ』(*Up and Down in the Dales*, 2004)では、結婚したフィンにいいよ子どもが生まれてくることになる。自分が父になる、という思いは、視学官としての物の見方を広く、深く、変えていく。児童生徒の背後にある家庭の姿に目を届け、その目で自らの家庭をも顧みて、彼の仕事はいっそう真情と共感のこもったものになっていく。

ある中学校でフィンの目に留まった作文は、シングルファーザーである父との暮らしを淡々とつづる、味わい深いものだった。書いた生徒と話してみても、フィンはさらなる感銘を受ける。人から見たらごく平凡だが、自分には特別な存在である父。自分が間違いをしたら、きちんと謝る父。うまくできないことや知らないことがある、と認めるのは、弱いということではない、と言う父。なにも恥じることはない、いつだって正直でいることが一番だ、と言う父。そんな父への親愛と敬愛をさりげなく語る、この男子の静かなたたずまいに、フィンは千金の価値を見出す。たとえ地味でも、新聞を飾るようなことはなくても、こんな子こそが、愛情のある家庭がはぐくんだ子どもの、ひとつの理想像なのだ、と。

“... Well, Russell, I hope that if I have a son, he will speak about me in the same way as you speak about your father.”

“That’s really up to you, isn’t it, sir?” replied the boy, smiling broadly. (55)

(「……ねえ、ラッセル君、もし私に息子ができたら、君がお父さんのことを話すのと同じように、息子が私のことを話してくれたらな、って思うよ。」)

「それはほんとに、先生次第ですよ？」とその子は答えて、にっこり笑ってみせた。)

この子の粹な返答は、じつに正鵠を射ていた。どんな息子になるかは、自分がどんな父親になるかで決まるのだ。

What would my sons or daughters say of me when they were teenagers, I thought. Would I be so loved and respected like Russell's father? Would I be as special to them as his father clearly was to him? (59)

(私の息子たちや娘たちが10代になったら、私のことをどう言うだろう、と私は思った。私はラッセル君の父親のように、愛され、尊敬されるだろうか。私は子どもたちにとって、あの子の父親くらい明らかに、特別な存在になるだろうか。)

視察の帰り道、この数週間に会った、味のある子どもたちのことを思い返すフィンの心を占めるのは、家庭環境の大切さである。

All of them, I guessed, came from homes where there was justice and honesty, joy and grace, compassion and love...I thought about our own unborn child, and promised myself that I would make him or her as happy a child as possible. (97)

(あの子たちはみんな、おそらく、正義と誠実、喜びと恵み、思いやりと愛情のある家庭で育っているのだ……私は自分の、これから生まれてくる子のことを思い、自分に誓った。男の子でも女の子でも、とにかくできるだけ幸せな子にしよう、と。)

いざ子どもが生まれてくると、フィンの思いは、祈りにも似た切実さを帯びる。自分の子の幸せへの願い。家庭に恵まれない子どもたちのために身を捧げようとする使命感。その両方がフィンの中で、ひとつになる。

“I want our son to have the very best start in life,” I said. “The very best.” As I looked down at our baby, snuggling up to his mother, I thought of little Matty and the other sad, fragile children whom I had come across on my travels as a school inspector; children who were neglected, disparaged, damaged and sometimes abused, children who would never know the warmth, encouragement and love of a good home. (339)

(「ぼくたちの息子には、人生の始まりは最高のものであってほしい」と私は言った。「とびきり最高の。」自分たちの赤ちゃんが母親にしがみついているのを見下ろしながら、私は思いを馳せた。小さなマッティ君や、ほかにも視学官としての巡回で出会った、悲しげで、かよわい子どもたち。放っておかれ、蔑まれ、傷つけられ、ときには虐待される子どもたち。善き家庭のあたたかさ、励まし、愛情も、決して知ることのないだろう子どもたちに。)

フィンの読書指導の大元にある家庭教育への思いは、大きな人間愛に根差していた。読書指導は親としての愛情表現の、ひとつの重要な形であり、だからこそ「毎晩親子で本を読むこと」は、子どもの人生のスタートに際しての最大の贈り物となるのである。⁵

3. 学校教育と読書指導

3-1 児童生徒の才能

学校教育における読書指導はフィンの専門中の専門であり、教材選択や指導技術など、テクニカルな面についてはいくらでも論を展開できるはずであるが（実際に教員向けのマニュアル本では、生徒のレベル別・テキストのジャンル別に、仔細にわたり具体的な指導案を提供し、方法論を解説しているが）、『デールズ』シリーズで彼がフォーカスするのは、教育現場の成果と課題である。本を愛する良い読み手を育てるにあたり、お手本になる実例と、克服すべき状況を、フィンはひたすら拾い上げ、紹介する。それは学校で「読むこと」の事例集であり、エピソード集であり、小説という形の報告書である。そして、細かなプロセスに拘泥するよりも、まずは目標になる模範を掲げてモチベーションを高めるイメージ・トレーニングが、ひろく読書の啓発をめざす、このアンソロジーの肝なのだ。

その範例収集の主な観点は児童生徒・教員・設備にわたるが、そのうちフィンが最も注目するのは「良い読み手」である。『デールズ』シリーズ第1巻、『谷の裏側』(*The Other Side of the Dale*, 1998)で、荒廃した貧困地区のカトリック系の小学校を訪れたフィンは、驚くべき7歳児たちに出会う。

マリーは「動物園の大きい獰猛なライオン」についての本をフィンに読み、物思いに沈む。その感想は、繊細な感受性、想像力と洞察に満ちている。

“What are you thinking?” I asked quietly.

She thought for a moment, then sighed wistfully. “Oh, I was just thinking what the old lion was doing before they went and put him behind bars.”

“He does look a fierce old lion, doesn’t he?” I remarked.

“I think I’d be very angry locked up in a cage all day and remembering the jungle.” She went on to explain to me how badly she felt humans treated animals. (87)

（「何を考えているのかな」と、私は静かに訊いた。

この子はしばし考え、それから切ないため息をついた。「ああ、ちょっと考えてたのよ、このおじいさんライオン、動物園のおりに入れられる前は、何してたのかな、って。」

「獰猛な老ライオンって感じだよね、これ？」と私は論評した。

「わたしだったら、一日中おりの中に閉じ込められたりしたら、ものすごく怒るわ、そして、ジャングルを思い出しているわ。」この子はさらに、人間って、なんてひどく動物を虐待するのかしら、と私に、思うところを縷々述べた。）

ジョンは恐竜についての本を読んで聞かせ、視学官も知らなかった知識を披歴する。それは、読書が確実に子どもの教養として身につけていることを示している。

He could pronounce many of the great monsters’ names and concluded his very competent reading with a small lecture on the different kinds of prehistoric creatures.

“Of course,” he remarked, “they are not really called dinosaurs, you know.”

“Are they not?” I replied.

“Prehistoric lizards is the correct name for them. Did you not know?”

I did not and told him so. (88)

(この子はこの巨大な怪獣の名前の多くを発音できたし、大変にてきぱき音読して、しまいには先史時代の生物の多様な種類についてひとくさり講義までしてくれた。

「もちろん」とこの子は解説した、「ほんとは恐竜って名前じゃないんだけどね、ほら。」

「そうじゃないの？」と私は返した。

「先史時代の蜥蜴類ってのが正しい名前さ。知らなかったの？」

私は知らなかったので、そう言った。)

レベッカは見事な抑揚で生き生きと、自信にあふれた朗読をしてみせて、フィンの蔵書に興味を示す。

“Do you have a lot of books at home?”

“Yes, too many.”

“I don’t think you can have too many books,” she replied. (88)

(「おうちにはたくさん本があるの？」

「うん、ありすぎるくらいにね。」

「本がありすぎるってなんて、ないと思うけど。」と、この子は返した。)

本はいくらあってもいいものだ、というレベッカの卓見には、本がろくにない家庭で育つことの飢餓感がにじんでいる。そして、クラスで最年少のこの女兒は、フィンの出した読みのテストを難なくこなして満点を取り、テストは大好き、もっとないのか、と催促までするのだ。

工場跡や倉庫や廃屋だらけの、暗くて陰鬱でさびれた町での、この高水準は、地獄の中に現れた天国の趣で、それは校長を務めるシスターの努力の賜物だった。家庭教育に恵まれない子どもたちでも、学校教育がそれを補完することで、ここまで豊かな読み手になれる、という証が、そこにはある。

第4巻では別の小学校で、またも恐竜博士の男児に会う。この子はフィンに恐竜の本を読み聞かせながら、本文の内容にコメントを付け加え、挿絵のどこに着目すべきかを指摘し、いっばしの講義をものする。

“You’re a very good reader as well as being so knowledgeable, Alexander,” I told him.

“Yes, I know,” he said in a matter-of-fact voice. “And you’re a very good listener.” (9)

(「きみは読むのがとてもうまいだけでなく、すごく物知りなんだね、アレグザンダー」と私は言った。

「ああ、そうだよ」と彼はさらっと言った。「先生も、なかなかの聞き上手だね。」)

この笑える返しを支えている自己肯定感は、やはり家庭の裏打ちがあつてのもの、とすぐにわか

る。

I smiled and shook my head. I have met many a precocious child in my time but Alexander took the biscuit. “And when you leave school, I expect you want to work in the Natural History Museum in London, don’t you, and be the world expert in dinosaurs?”

“Oh no, Mr Phinn, I want to be a solicitor, like my father. There’s not much of a future in dinosaurs.” (9)

(私はほほえんで、かぶりを振った。これまで、おませさんにはさんざん会ってきたが、このアレグザンダーが一等賞だ。「きみは学校を出たら、きっとロンドンの自然史博物館で働きたいんじゃないのかい、それで、恐竜の世界的権威になりたいんだろう。）」

「いや、ちがうよ、フィン先生。ぼくは弁護士になりたいんだ、父さんみたいにね。恐竜には未来はあんまりないからね)」

父は弁護士。道理で口八丁、手八丁。この子の自信と余裕は、知性とユーモアのある家庭から来ていた。ここには学校と家庭、両方の教育力が相乗作用を起こす可能性が示されてもいる。

こうした朗読名人の子どもたちは、ほかにもシリーズの随所に登場する。かれらは将来、自分の子に読み聞かせをする「良い親」予備軍として、学校教育の恩恵を家庭に還元することにもなるのである。⁶

3-2 教員の献身

フィンの名教師のサンプルもコレクションして歩くが、なかでも突出しているのは、子どもたちに文学の喜びを教え、ことばの芸術性に目を開かせる、「読むこと」の伝道者ともいうべき教員である。第3巻では視察先の中学校で、詩について活発な討論を生徒たちにさせる教師の姿に、フィンは自分の恩師の面影を重ねる。

“...I was telling the girls that good poetry is so wonderful to read and listen to and write themselves...It was only when I met a remarkable teacher in the sixth form, Miss Ruddock, who sounds rather like your Miss Wainwright, Mr Phinn, that the magic door of poetry was opened for me....”

Miss Bridges glanced at her watch. “Well...They have in a sense immortalised them. They will live forever and be read about for many years to come....”

Listening to that diminutive woman in the long brown skirt and white blouse that bright February morning with the sunlight streaming through the small window, I was back in the classroom of my own English teacher, remembering her warmth, intelligence and commitment. It had been my unquestionable good fortune to have been taught by Miss Wainwright, I thought to myself, to have had my mind stretched, my aspirations raised and my love of poetry developed. In thinking of her at that moment and recalling all the things she did for me, she was in a sense in that classroom with us. (166)

(「……いま生徒たちに話していたところですよ、よい詩というのは読むのも聞くのも本当に

すばらしいから、自分でも書いてごらんさといって……私は最終学年のとき、すごい先生——あなたのウェインライト先生に似てるかも、フィン先生——ラドック先生に会って初めて、詩の魔法の扉が私に開かれたんです……。」

ブリッジズ先生は腕時計をちらっと見た。「さて……詩人は、自分の愛する人を、ある意味で不滅の存在にしているのです。愛する人は永遠に生きて、その人のことが読み継がれるのです、何年も何年も……。」

陽光が小さな窓から降り注ぐ、その明るい2月の朝、茶色のロングスカートと白いブラウスの、その小柄な女性のことばに耳を傾けていると、私は自分の英語の先生の教室に戻り、彼女の温かさ、聡明さ、懸命さを思い出していた。まぎれもない幸運だった、と私はひとりごちた、ウェインライト先生に教わり、視野を広げてもらい、望みを高めてもらい、詩を愛する心を育ててもらったのは。その瞬間、彼女のことを思い、彼女が自分にしてくれたことのすべてを思い返していた時、ある意味で彼女は、その教室に、私たちと一緒にいたのである。）

ウェインライト先生からフィン先生へ。ラドック先生からブリッジズ先生へ。詩を愛する心は、教師から生徒へと、くりかえし受け継がれていく。この世代間の継承は、まさに家庭教育における親子の関係を、学校教育においても再演するものである。読みを教える優れた教員とは、親にも通う人間愛の持ち主であることが、フィンの追慕からは浮かび上がってくる。

このことが、じつは当時の教育行政に対しては、強烈な皮肉と批判になっている。シリーズの時代背景であるサッチャー教育改革の成果主義のもとでは、詩の教育は不当なほど軽視されていた。全国共通学力テストの点数によって公立学校が序列化され淘汰されていく中で、人間性に回帰しようという教養主義の教員の声は、大きな危機感を伴っていたはずなのである。

フィンがとくに賞賛するもうひとつの教員のタイプは、そのサッチャー政権による教育予算削減の中、児童生徒の読み方教育のため、経済的支援に奔走する教師である。家庭にはできないことを学校がしよう、とするかれらの献身の中に、やはりフィンは親の心に通じる愛情を見る。⁷

たとえば第4巻でフィンがスラムの公立小学校を訪ねると、校長室がクリスマスプレゼントの包みに埋まっている。

“Sorry about this, Mr Phinn,” apologised the headteacher, clambering around the piles of parcels. “We don’t want the children to see them and my room is the safest place.”

“Are these all for the children?” I asked, amazed by the spectacle before me.

“Indeed, they are,” the headteacher replied. “we like to give each child a small gift of Christmas. Always a book. Nursery rhymes or fairy tales for the infants, a poetry anthology or children’s novel for the older ones.”

“What a lovely idea,” I said. “But however can you afford it?”

“Well, the Rotary Club and the Lions help out,” explained Mrs Gardiner, “and we have raffles during the year, bingo sessions and other fund-raising activities....” (235-236)

(「ごめんなさいね、これ、フィン先生」と校長は謝って、包みの山をかき分けた。「子どもたちに見られたくなくて、そうすると私の部屋が一番安全な隠し場所なの。」

「これ、みんな、子どもたちに？」目の前の光景に仰天して、私は尋ねた。

「もちろん、そうですとも」と校長は答えた。「どの子にもクリスマスのささやかな贈り物を

したいの。いつも、本。小さい子には童謡かおとぎばなしで、大きい子には詩集か子ども向けの小説よ。」

「なんて、すてきな思いつきなんだ」と私は言った。「でも、いったいどうやってまかなえるんです？」

「ええ、ロータリー・クラブやライオンズ・クラブが力になってくれるのよ」とガーディナー校長は説明した。「それに学校の年間行事でも、ラッフルくじの会とか、ビンゴの会とか、いろいろ資金集めの活動をしてるわ。）」

続いて校長は、最近の家庭の状況を嘆く。家にテレビはあっても、本は一冊もない。クリスマスにおもちゃやお菓子や自転車はもらっても、本はない。図書館にも行かなければ、本屋にも行かない。そもそもクリスマスに何ももらえず、学校からの本だけがプレゼントの子もいる。先生は読むことに熱心ですね、とフィンが水を向けると、校長は身の上話を始める。

“...I get it from my parents. My father used to say that books are the architecture of a civilised society and reading the most important tool of learning...My mother read to me every night until I was well into my teens, and she bought me a book every birthday and every Christmas and always inscribed it with a little message. Those books are my treasured possessions...I feel that children should own books and build up a little library, so we buy them one each Christmas and put a bookplate in the front with their name and the date. Reading is so important. If parents would just spend fifteen minutes each evening with their children, talking about the words and the pictures and making reading enjoyable, what a difference it would make to their learning.”
(236-237)

(「……それは親譲りなの。父はよく言ってたわ、本は文明社会を築く柱で、読むことは学びの一番大切な道具だって……母は毎晩私に本を読んでくれて、私が10代になっても続けてくれてたわ、誕生日にもクリスマスにも、いつも本を買ってくれて、必ずちょっとしたメッセージを添えてくれたわ。その本はみんな、今も私の宝物……子どもは自分の本を持つべきだし、ささやかでも蔵書を備えるべきよ、だから私たち教員は、クリスマスには子どもたちに本を買って、扉には蔵書票を貼って、子どもの名前と日付を入れるの。読むことは本当に大切。親が毎晩15分でもいいから子どもと過ごして、ことばや絵についてお話をして、読書を楽しんでくれたなら、どれほどの違いが学びにもたらされることか。）」

この校長が学校で実践しているのは、ある意味で、家庭教育の肩代わりですらある。学校教育における読書指導の根幹にあるのは、この親心だが、それが肝心の親において薄れている事態への警鐘が、ここでは鳴らされているのでもあった。

3-3 設備の充実

学校教育における読書指導の設備面にも、フィンは光を当てる。視察で必ずチェックを入れるのは、「読書コーナー(Reading Corner)」。イギリスの学校なら、どの教室にもあるもので、後方の一隅にカーペットが敷かれ、クッションや椅子が置かれ、子どもが授業中や休み時間に自由に本を読んだり、先生の読み聞かせを車座になって囲んだり、本についての話し合いをしたり、「読む

こと」のさまざまな活動が行われる場所である。このしつらえには担任の個性や心配りが如実に表れ、それが教室全体の雰囲気に影響する。ここが楽しげだと、ふだんのほかの学びも楽しくなる。子どもがくつろげる場所、楽しめる場所、自分らしく過ごせる場所。それはとりもなおさず、家庭の再現である。学校教育における、この読書の舞台は、「読むこと」の理想がやはり家庭にあることを、再確認させてくれる。

フィンが好んで描く読書コーナーの風景は、ここで視学官の自分が子どもたちにへこまされるシーンである。農村の子どもたちは、こと動物にかけては玄人並みに知識が豊富。ヒツジの種類や、ウサギの習性。専門的な観点から読解を行う子どもたちにかかると、絵本は図鑑。名作童話も噴飯もの。「えらいお客さん」であるはずのおじさんも、ただの「無知なよそもん」として憐れみをかけられる。かと思うと、フィンのお気に入り、涙なしでは聞けないはずの哀切な物語が、思いもかけない反応や解釈で迎えられ、ほとんどお笑いになる。そこには、この地域の子どもたちの、生活に根差した、たくましく独創的な「読み」がある。と同時に、知らないことを素直に知らないと認め、子どもをあるがままに受けとめる、あるべき大人の姿、親としての理想像も、そっと添えられている。学校の読書コーナーは、「読むこと」を通じて大人と子どもが人間としての真情を交わす場としても、家庭の比喩になっているのだ。

一方で、学校の図書室は、まさに受難の時代のただなか。サッチャーの緊縮政策で通常の授業の教材・教具の調達すらままならぬ折、蔵書の充実など夢のまた夢。学校教育における読書指導の、最大の困難がここにあった。ここでフィンがコレクションするのは、模範的な事例ではなく、その逆。トンデモ本のタイトルをメモする事情が、第4巻で語られる。

...I always tried to find the time to check the school library...I had come across some weird and wonderful titles in my time, most of which should have been thrown out onto the bonfire years ago. I made a habit of jotting down some of the worst into a notebook. They often came in handy when I was invited to give after-dinner talks.

I scanned the dull green and grey covers of the books on the shelves, and knew immediately I would be able to add to my collection: *Travels in Southern Rhodesia*, *Harmless Scientific Experiments for Boys* (I had once found the equivalent book for girls), *The Stately Houses of Scotland* (five volumes), *The Collected Sermons of Bishop Francis Feasby*....

The library of King Henry's College appeared not to have been updated for many years. I found...*The Walking Stick Method of Self Defence* by an Officer of the Indian Army...These were for the collector of the weird and wonderful but not of any interest to teenagers. I looked in vain for the bright glossy-backed paperbacks and sports magazines that appeal to adolescent boys but found none. I discovered a selection of more modern books in the fiction section but the non-fiction stock was lamentably out-of-date and inappropriate. (58-59)

(……私はいつも時間を見つけては、学校の図書室をチェックした……これまで、奇妙奇天烈・不思議千万な題名に出くわしたことがまあり、大半はとっくにかがり火に放り投げてしかるべきものだった。そのうち一番ひどいのは、ノートに書き留めておくことにしていた。そういうのが、夕食会の締め講義に招かれた時、よく役に立った。

棚に並ぶ本の、さえない緑や灰色の背表紙を眺め渡すと、たちまちわかった。これはコレクションが増やせるぞ。『南ローデシアの旅』、『無害な理科の実験、男子編』(女子編も見たこと

があるな)、『スコットランドの大邸宅』(全5巻)、『フランシス・フィーズビー主教の説教集』……。

キング・ヘンリー中学校の図書室は長年、手が入っていないようだった。見つかるものといえば……インド軍の某将校著、『杖の護身法』……こういう表題は奇妙奇天烈・不思議千万の蒐集家にはよくても、10代にはお呼びでなかった。思春期の男子の気を引きそうな、明るい光沢のあるペーパーバックやスポーツ雑誌はないものか、と捜してみても無駄なことで、一冊も見つからず。フィクションの棚には、もう少し現代的な選集を大発見。だがノンフィクションの在庫は、嘆かわしいほどに時代遅れで、出る幕のないものだった。

困りものの実情を笑いのネタにして世間の興味を引く、このフィンの手法は、真正面からの告発や大上段に構えた批判よりも、より広い層、より多くの人々に浸透しやすい。嫌悪感や重圧感で目をそむけることなく、問題意識を共有し、定着させることができる。性急な解決より、考え続ける姿勢の涵養。この戦略は、フィンの社会教育における読書指導の柱にもなっていくのである。

4. 社会教育と読書指導

4-1 イギリスの読書環境

イギリスは元来、「読むこと」についての社会的・文化的環境は、かなり整った国である。まず公共図書館の数は日本の約10倍、しかも立地がよく、町の中心部にある(清水2009)。日本との人口の差も考えると、市民の利用のしやすさは、さらにその何倍にもなる。これをフル活用した結果、91歳の老婦人が60年以上にわたり25,000冊を借りて読破した例が報道されており(朝日新聞2009)、「両親が読書家で、私も5歳から熱心に読み始めた」という本人のコメントは、家庭教育の重要性を裏付けている。ロアルド・ダール(Roald Dahl)の『マチルダ』(Matilda, 1988)では、読むのが好きな少女が、本といえば母親のレシピ本が1冊しかない家を抜け出し、内緒で近くの公共図書館に通い、司書の支援でたぐいまれな読書家、小さな大天才に育っていく。教育に関心のない母、教育に敵意すら持つ父、という家庭環境にあって、未就学児でも歩いて通えるところにある公共図書館が大きな救いをもたらし、人生を変えていく。またアラン・ベネット(Alan Bennett)の『やんごとなき読者』(The Uncommon Reader, 2007)では、エリザベス女王が移動図書館で読書の喜びに目覚め、こっそり利用して公務中に本に没頭する。筋立ては虚構ながら、イギリスの図書館行政がどんなに多忙な大人にも行き届くことの極端な例になっている。

古書店の充実もイギリスの読書文化を支えており、アメリカの愛書家とイギリスの古書店員の20年にわたる書簡集、ヘレーン・ハンフ(Helene Hanff)、『チャリング・クロス街84番地』(84, Charing Cross Road, 1970)の訳者は、「この本ができたのは、アメリカにこれとっていい古本屋がないからだ」(江藤225)と、英米の差を指摘している。リチャード・ブース(Richard Booth)が田舎町ヘイ・オン・ワイ(Hay-on-Wye)に設立した古本王国は1977年に独立とEEC脱退を宣言。王のブース亡き現在も、ヘイは古書の町として国際的な名声を得ており、英国人の書物愛の象徴的存在となっている。高価な稀覯本(antique)であれ、安価な中古本(secondhand)であれ、古本は、前の世代——広義の親から、伝えられた読み物である。その歴史的遺産が入手できる機会がふんだんにあることは、図書館の利便性の高さと並んで、イギリス人の一生にわたる読書生活に大きなメリットとなっているはずなのだ。

しかしながら英国の社会人の英語能力の衰退を、第4巻でフィンの同僚視学官は大いに嘆く。

“... You see, they make the effort and the English do not... The foreigner very often has a better command of the English language than the English have themselves.”

...

“... You only have to look around to see how the use of English has declined. People don't seem able to spell or punctuate or express themselves any more. Julie, for example, is forever misplacing a participle.”

...

“And splitting her infinitives,”

...

... “And when we had young Frank doing the letters, his spellings were patently bizarre. He was a nice enough young man, but his English!”

...

“Then there's Connie,”

...

“She is a prime example of how not to use English. She mangles and murders the language with malapropisms....” (303-304)

(「……ほら、外国人は努力するけど、英国人はしないだろ……外国人のほうが英国人より、英語力が上って、ざらだしね。」

……

「……見回してみりゃ、どんだけ英語力が衰退してるか、一目瞭然さ。たとえばジュリーなんか、いつまでたっても分詞の位置を間違っばっかりいる。」

……

「それに不定詞を分離してるし、」……。

……

……「フランクの兄ちゃんに文書を打ってもらってた頃も、やつのスペリングはそりゃもう奇っ怪でさ。感じのいい若者だったけど、英語ときたら！……」

……

「そんで、コニーがいるだろ」……。

……

「ありゃあ、英語をどう使うべきでないかの絶好の例だよ。お得意の言い間違いで、英語をズタズタに切り刻んで、息の根を止めるんだ……。」)

州教育委員会の秘書・助手・掃除婦の英語を容赦なくこきおろす、この視学官の担当は英語科ではなく、数学科と体育科。専門外の間人から見ても目に余る、大人たちの英語の、英国にあるまじき乱れっぷり。職種から言えば、単純に出身階級の格差の表出⁸とも解される現象ではあるが、州内の全地域を統括する視学官には当然見過ごせない。しかし英語教育の専門家である当のフィンは、この同僚のように義憤を爆発させるどころか、その逆とも言える策に出る。間違いを逆手に取り、それを笑いのめして州民・国民の意識向上を図るのだ。

4-2 誤用の帝国

社会人の英語乱用の対応策とはいっても、フィンの場合、リカレント教育、オープン・ユニバーシティなど、いかにも出てきそうなキーワードのほうには、話は行かない。社会教育が必要な状況を豊富な例で提示するものの、それはまず大人の言語活動の逸脱を徹底的に楽しむためなのだ。

インプットがあるから、アウトプットがある。そのプロセスにおけるねじれが「間違い」という結果になったとしても、まずは何らかの形の「読み」が存在したからこそ、素材が仕込まれたはず。とすれば、間違いを否定することは、表現意欲のみならず、学ぶ意欲、読む意欲をも削ぐことになりかねない。矯正よりも許容。そして間違いは、定型を破る革新、新たな創造にすらつながる。第3巻でフィンがコニーを「このうえなく創意に富んだ、言い間違いの使い手」(35)と誉めそやすのは、皮肉でも嫌味でもなく、本心なのだ。読者に「間違うのもいいかも」、「間違いにも味がある」と思わせ、間違いを愉しませることは「ことばへの興味を終生失わない」という、社会教育における読書指導の要へと読者を導くことになる。

第2巻でのコニーの迷言オンパレードは、豪華なまでの間違いメドレー。美術担当の視学官がセミナーをしたあとは研修室の掃除がいつも大仕事、と文句を垂れて“can barely keep above water”（水面から首を出しておくのも大変、苦労で溺れそう）と言うべきところ、コニーにかかると“can barely keep my feet above water” (77)（水面から両足を出しておくのも大変）。シンクロナイズド・スイミングかっ！？とツッコミたくなる。この天敵も“his art courses”（あの先生の美術の授業）ではなく“his artery courses”(78)（あの先生の動脈の授業）と呼ばれては、芸術家ではなく医者に聞こえる。続いての旅の土産話も、船酔いの愚痴。船上でトイレへの階段を何度も往復した自分を“like a shuttlecock”(80)（バドミントンの羽根みたい）とたとえるが、フィンが内心、それ“like a yo-yo”（ヨーヨーみたい）のつもりだよ、と解釈。沈黙を守り、平静を装うが、次の台詞には、ついに笑いをこらえきれなくなる。

“...I've never been so glad to get my feet on terra cotta.” I sputtered, nearly choked and covered my tie in tea. (80)

（「テラ・コッタに足を下ろしたのが、こんなにうれしかったことはないよ。」私は嘔き出し、息が詰まりそうになり、ネクタイを紅茶浸しにしてしまった。）

本当は“terra firma”（固き地、陸地、大地）とラテン語でかっこよく着地を決めたはずが、“terra cotta”では「素焼きの植木鉢」。むしろ転ぶよな、というか、割るんじゃないの。彼女の体格では、二重にズッコケたオチになる。まさに「記憶すべき言い間違いで有名」(77)な猛女の、面目躍如の傑作である。

フィンの収集が結実した英語間違い傑作選、『メタメタの英語たち』(Mangled English, 2013)は、英語の間違いの金字塔ともいうべき集大成で、数十項目にわたる多彩な間違いのパターンと用例が燦然と並ぶ。序文では、一筋縄ではいかないところにこそ英語の「豊かさ」(2)がある、と喝破。そうしたことばと、生涯にわたって付き合い、戯れ、楽しむことの喜びを伝えることが、この、一見いかにもお軽いユーモア本の担う、社会教育における読書指導の使命なのだ。

なかでも出色なのが、巻頭を飾る「本屋へのリクエスト名言集」(bookshop “asked-fors”)。客に「変な名前の方が書いた、学校についての本なんだけど」(3)と尋ねられ、すぐフィンの新作を

出してきた書店員の話から始まって、『アンネ・フランクの日記』を書いたのは誰？(3)、「実物写真の載ってる恐竜の本」(4)や「劇の台本じゃなくて、ちゃんとした英語の小説の『ハムレット』」(4)などの、目が点になるようなフレーズ。それに、うろ覚えの題名たちが最高に笑える。

The Great Gas Bill (『かさむガソリン代』) by Scott Fitzgerald (4)

[正しくは *The Great Gatsby* (『偉大なるギャツビー』)、以下同様]

Colour Me Purple (『私を紫に塗って』) by Alice Walker (4)

[*Colour Purple* (『紫色』)]

Satanic Nurses (『悪魔の乳母』) by Salman Rushdie (4)

[*The Satanic Verses* (『悪魔の詩』)]

Less Miserable (『そんなにみじめじゃない』) (4)

[*Les Misérables* (『みじめな人々』、『ああ無情』)]

Useless (『ヤクタタズ』) by James Joyce (6)

[*Ulysses* (『ユリシーズ』)]

Catch Her in the Eye (『彼女を目玉でつかまえて』) by J. D. Salinger (6)

[*The Catcher in the Rye* (『ライ麦畑でつかまえて』)]

The Odd Sea (『変な海』) by Homer (6)

[*The Odyssey* (『オデュッセイア』)]

まだまだ続く長大なリストが教えてくれるのは、「本屋は楽しい場所だ」ということ。本の題名がよくわかっていないながら、それに挑戦しようとする客の心意気や、良し。わかっていないからこそ、読むのである。ここには読者志望の大人たちを応援し、励ますフィンのまなざしがある。

「大人も間違ふ」ことを素直に認めるだけでなく、間違いにもへこまず、いきりたたず、間違いは愉快、と評価までする。そのたくましいユーモア感覚、温かい包容力は、理想の「親」像の進化形でもある。フィンにとっては、社会教育における読書指導も、その根は家庭教育と同じところにあることがわかる。

4-3 ベストセラーという教科書

そしてフィンのユーモア小説は、社会人にとって格好の教科書となる。なにしろ視学官時代には各種講演に引っぱりだこで、「笑いの詰まった樽」(barrel of laughter)の異名をとった、話し上手のエンターテイナー。ことばのおもしろさ、英語の豊かさ、読むことの大切さ、親子の絆——およそ大人が学び続けるべきことが、散りばめられた笑いに腹を抱えているうちに、胸の奥に入ってくる。とにかく「読ませる」フィンの本は、成人教育における読書指導を、みずから実演するメディアなのだ。

『デールズ』シリーズの構成と語りが道德物語・紀行文学・テレビ番組の造りを兼ね備え、メディアミックスの効果を出していることを武田(2020b)は指摘しているが、このメリットは、各ジャンルと結びつく学校・旅行・家庭の経験を長年積んだ大人の読者にこそ、とくにアピールする。

また州教育委員会での視学官たちのやりとりは、武田(2020a)の例示する『笑点』並みのおもしろさの中にも、「読むこと」を奨励する仕事の厳しさと苦勞を打ち明けることで、大人どうしならでは、職場の裏話を共有するスリルと親しみや、同じ職業人としての共感や連帯感を喚起して、大人を読書へといざなう働きもある。

ベストセラーの教育的効果としては、閑田(2017)の論ずる、19世紀のディケンズらによる読者層拡大の場合と、同様の原理を見ることもできる。サスペンスやユーモアなど、物語の魅力が手段となっているところは同じ。目的のほうは、当時が識字率の向上だったのに対し、フィンの場合には読書意識の高揚、というところが異なりはする。しかし、「読むこと」が、地域や国家の繁栄まで展望した上での教育振興⁹の、最初にして究極のステップであることは、いまも変わらない。

社会教育における読書指導は大人を育てることで社会を育てる。それがまた家庭を育てることになる。親と子の役割が循環しながら続いていくのと同じように、家庭教育・学校教育・社会教育における読書指導もまた、連続性を持って円環を成す。その全体が「読むこと」の「親業」という、人間社会の大事業なのである。

5. 結

文学者かつ教育者のフィンにとって、「読むこと」(reading)と「親であること」(parenting)は等価である。「読む親」のいる家庭の変種として、学校や図書館や書店があり、家庭教育における読書指導の拡大型として、学校教育・社会教育における読書指導がある。その目標は、本を愛する心、ことばを愛する人。その源泉には、親としての人間愛。フィンの文学活動と教育活動の接点には人文科学(the humanities)と人間愛(humanity)が両立しており、両者の融合した創作と実践こそが彼のライフワークであると言っていいだろう。

こうした熱く遠大な読書指導観は、ややもすれば古風、旧式と思われかねない。しかしフィンが現場で奮闘していた現役時代には、すでにテレビに子守をさせる親が社会問題となっていた(山本2012)。フィンの主張は、だからこそ光るのだ。スマホ育児がはびこる現在なら、なおのこと。マスメディアとテクノロジーが生活様式を激変させていく現代にこそ、見失ってはならないもの、いっそう求められるものが、ここにある。ICT時代を迎えても、教育の目的と文学の魂は不変であり、小手先の小技にとらわれない、陳腐化することのないフィンの骨太な思想は、「読むこと」の本質へと、つねに読者と指導者を立ち戻らせてくれることだろう。

注

1. 家族以外にも、教員たちがフィンの進路を支援した事情の詳細については、武田(2019b)を参照のこと。
2. この祖父と孫は、『小さな村の学校』シリーズのダニー(Danny)少年とその祖父の原型にもなっている。
3. 教員人事にも影響する視学官の視察が、学校現場にとって、いかにプレッシャーであるかについては、山本(2012)を参照のこと。
4. 自伝では、フィン自身がやはり妙に礼儀正しい古風な子で、まわりから浮いていたことが明かされている。
5. 『マチルダ』の主人公が親に読書を邪魔されていることは、それゆえ十分に虐待なのである。
6. フィン自身も朗読の名手として、BBCのラジオ・テレビに多数出演している。
7. フィンも、校長が「君は演劇を見るべきだ」と劇場の切符をプレゼントしてくれたおかげで、生まれて初めて観劇し、その感動体験から英語科・演劇科の教員になったことが、自伝に記されている。
8. 学校掃除婦の職業的背景については、武田(2019a)を参照のこと。
9. この点についての詳細な政治的分析は、武田(2019b)を参照のこと。

参考文献

Dahl, Roald. *Matilda*. London: Puffin, 1988.

“Gervase Phinn.” *Wikipedia*. Wikimedia Foundation, Inc. 31 May 2020

<https://en.wikipedia.org/wiki/Gervase_Phinn.>

Hanff, Helene. *84, Charing Cross Road*. 1970; New York: Penguin, 1990.

Miss Read. *Tales from a Village School*. London: Michael Joseph, 1994.

Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin, 2010.

---. *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin, 2010.

---. *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin, 2010.

---. *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin, 2010.

---. *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin, 2010.

---. *Road to the Dales: The Story of a Yorkshire Lad*. London: Michael Joseph, 2010; London: Penguin, 2011.

---. *Out of the Woods But Not Over the Hill*. London: Hodder & Stoughton, 2010.

---. *The Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2011.

---. *Trouble at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2012.

---. *The School Inspector Calls!* London: Hodder & Stoughton, 2013.

---. *A Lesson in Love*. London: Hodder & Stoughton, 2015.

---. *Secrets at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2016.

---. *The School at the Top of the Dale*. London: Hodder & Stoughton, 2018.

---. *Tales Out of School*. London: Hodder & Stoughton, 2020.

---. *Young Readers and their Books: Suggestions and Strategies for Using Texts in the Literacy Hour*. Abingdon: David Fulton, 2000.

---. *Mangled English*. Skipton: Dalesman, 2013.

江藤淳。「解説」。『チャリング・クロス街 84 番地——書物を愛する人のための本』。ヘレーン・ハンフ・著。江藤淳・訳。東京：中央公論社、1984。225-232。

閑田朋子。「イングランドにおける大衆読者層の形成と拡大」。『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化——19 世紀以降にみる英米出版事情』。東京：音羽書房鶴見書店、2017。104-129。

清水一嘉。「市民のための公共図書館」。『21 世紀イギリス文化を知る事典』。出口保夫、他・編。東京：東京書籍、2009。552-554。

武田ちあき。「イギリス教育小説における学校掃除婦の表象——その文化的意味と政治的機能」。

『埼玉大学紀要（教育学部）』、第 68 巻、第 1 号、2019a。271-284。

---。「ジャーベイズ・フィンの学校小説における教職観——その社会的・時代的・地域的な意味」。

『埼玉大学紀要（教育学部）』、第 68 巻、第 2 号、2019b。367-388。

---。「連合／分離の寓話としてのヨークシャー学校小説——地域間のポリティクスとパワーバランスの展開」。『埼玉大学紀要（教育学部）』、第 69 巻第 1 号、2020a。233-259。

---。「ヨークシャー学校小説におけるジャンルの交差——教育と娯楽の技法」。『埼玉大学紀要（教育学部）』、第 69 巻第 2 号、2020b。391-410。

「図書館から 2 万 5 千冊」。朝日新聞、2009 年 9 月 5 日。

ブース、リチャード。『本の国の王様』。東眞理子・訳。東京：創元社、2002。

「ヘイ・オン・ワイ」。 *Wikipedia*. Wikimedia Foundation, Inc. 2020 年 6 月 1 日

<<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヘイ・オン・ワイ>>

ベネット、アラン。『やんごとなき読者』。市川恵里・訳。東京：白水社、2009。

山本麻子。『ことばを鍛えるイギリスの学校——国語教育で何ができるか』。東京：岩波書店、2012。

(2021年3月31日提出)

(2021年4月22日受理)

Gervase Phinn's Views on Reading and Parenting in his School Novels

TAKEDA, Chiaki

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper surveys Gervase Phinn's views on reading as parenting on analysis of his school novels, teachers' manual and book of humour. Throughout his versatile career as a teacher, school inspector, professor, poet and novelist, Phinn has been an ardent advocate of reading, and a passionate promoter of "half an hour of reading with one's child at bedtime every day" as an ideal start of learning for a lifetime. For Phinn, home is the most important base of reading that is to be followed by schools, libraries and bookshops; home education is to be expanded or supplemented by school education and adult education. The objective of Phinn's enthusiasm lies in parental encouragement of lifelong love of books and language, rather than in pedagogical precision or detailed expertise. His literary text itself, a barrel of laughter, serves as an enjoyable textbook, and this author and educator embraces comical mistakes in wording as practical materials to arouse an interest in language and reading. In this modern age of television, computer games, social network services and other technological distractions, humour and humanity sought in Phinn's sound ideals are all the more important in order to battle against prevalent parents' neglect and for children's better future to be realized by reading.

Keywords: school novel, reading, parenting, library, bookshop